

# せん孔細菌病について

## 1 生態

せん孔細菌病は3種類の病原細菌が知られているが、主に *Xanthomonas campestris* pv. *pruni* という細菌により発病する。

本病は枝、葉および果実に発病する。枝での発病は、春型枝病斑（スプリングキャンカー）と夏型枝病斑（サマーキャンカー）があり、春型枝病斑は開花期から落花期にかけて結果枝の表面に認められ、亀裂を生じたり、カサブタ状となったりする。春型枝病斑の表面には黄白色の病原細菌が出て、雨滴に混じって風雨とともに分散する。夏型枝病斑は、当年伸長した新梢に形成された病斑をいう。通常、芽の付近の皮目を中心に、枝に沿って縦長の病斑を形成する。春型枝病斑と同様、病斑の表面から病原細菌が出て伝染源になるが、病原菌はここで越冬することはほとんどない。葉での病徴は初めカスリ状に白っぽくなり、さらに褐変し、穴があく。梅雨期に降雨が続くような場合、病斑形成がなくても激しく落葉することがある。果実では初め褐色の小斑点が生じ、果実の肥大にともない大きな病斑となる。本病によって、果実が腐敗することはないが、果実品質に対する影響は大きい。

病原細菌の越冬場所は、新梢の皮部組織内である。



図1 春型枝病斑（スプリングキャンカー）



図2 葉の病斑

## 2 発生状況

本病細菌の生育適温は25℃前後である。風当たりの強い園で発生が多い。夏から秋にかけて、降水量が多いと発病しやすい。また、台風の影響で風雨を強く受けた年は、病原細菌が広範囲に拡散し、傷ついた葉から植物体内への侵入が多くなり、植物体内の病原細菌量が多くなる。それにより越冬伝染源が多くなり、翌春の発病が多くなる。

## 3 防除対策

### (1) 伝染源の除去

発病枝（春型枝病斑）や周辺の新梢葉の発病部は、伝染源となるため、見つけ次第除去する。

## (2) 袋かけ

幼果は病原細菌への感受性が高く、初期に感染すると落果の原因になるため、早めに袋かけを行い、感染防止に努める。なお、袋かけは薬剤散布後速やかに行う。

## (3) 傷口侵入の防止

病原細菌は葉や果実の気孔等の自然開口部、風雨等による傷口から侵入すると考えられているため、防風ネット等による防風対策や害虫を対象とした薬剤防除を併せて行う。

## (4) 薬剤による防除

春型枝病斑や新梢葉の発病が認められる圃場では、ほかの葉や果実への二次伝染防止のため防除を行う。また、夏期に発病が認められた圃場では、次年度の発生を抑制するため、収穫後にも防除を行う。なお、防除にあたっては、最新の登録状況を参照し、適正に使用する。

(農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)